誰もが抱える悩みをパパッと解決！

福田貴一先生の福が来るアドバイス

精神的に成長すれば成績は必ず伸びます！

早稲田アカデミー
千葉ブロック統括責任者
福田　貴一

順調に伸びていた成績が急に伸びなくなる時期があった―。おそらく中学受験を経験した先輩のほとんどがこのように答えるでしょう。では、希望する中学校に合格した先輩たちは、どんなきっかけでその時期を脱出したのでしょうか。そのきっかけについて考えてみましょう。

塾に入れば偏差値は上がる!?

塾に通い始めた子どもの多くは、入るとすぐに成績が上がります。これは当然のことで、塾に入ったときは、“ゼロ”の状態。塾に通うことで勉強のやり方が身につき、自然にある程度のところまでは成績が上がるのです。おそらく、塾に入る前の偏差値から5～15くらいは順調に伸びていくでしょう。

しかし、順調に上がっていった偏差値も、その伸びがストップしてしまう時期が必ずやってきます。そもそも偏差値というのは、相対評価ですので、右肩上がりで伸び続けるものではありません。偏差値50の子どもが努力するのと同様に、偏差値40の子どもや偏差値60の子どもも努力するわけですから、学力が身についていても、偏差値は変わりにくくなってしまうからです。逆に言えば、偏差値が変わっていないということは、学力が身についていると思っていただいてかまいません。

精神的な成長と日々の努力が“停滞期”脱出のカギ

「ということは、うちの子はずっと偏差値55のまま？それだと希望校に届かない！」。そんな声も聞こえてきそうですが、心配はありません。偏差値が伸びる時期は必ずやってくるものなのです。伸びる時期の直前には“精神的な成長”が見受けられるケースが多くあります。偏差値が変わらなかった時期、つまり“停滞期”に蓄積されていた知識や学力が、“精神的な成長”をきっかけに成績として表れ始めるとお考えください。

そこで重要なことが“停滞期”における日々の努力です。がんばっているのに数字が伸びないことはつらく感じるものですが、この時期にコツコツと蓄積された学力が、その先の伸び幅となって表れてきます。逆に何も蓄積されていなければ、伸びるはずの時期がきても変わらないということもありえるわけです。

さて、伸びる時期のきっかけとなる精神的な成長ですが、それは子どもによって異なり、予測することもできません。あとから「あれがきっかけになったのかな？」と感じるだけです。たとえば、「弟や妹が生まれた」「ペットを飼い始めた」といったことがそのきっかけになる子どももいますし、肉体的な成長とあわせて自然と精神的に成長してくることもあるようです。

子どもの精神的な成長は、親の目から見るとなかなか気づかないもののようです。毎日一緒に暮らしていると、劇的な変化でなければわからないでしょうし、他の子どもと比較をすることもできないわけですから。

精神的な成長の時期は人それぞれ

「うちの子はいつまでも幼いからペットを飼えば…」とお考えになる保護者の方もいらっしゃるかもしれませんが、必ずしもそのことがきっかけになるわけではありません。精神的な成長の幅とその時期は子どもによって様々で、何度も小幅に伸びる子どももいれば、たった一度のきっかけで急激に伸びる子どももいるのです。

細かく成長を示す子どもに長い“停滞期”はありませんが、知識を蓄積する期間が短くなるので、成績も細かく伸びます。ただ、比較的順調に偏差値が伸びていくように見えるので、目標は持ちやすいでしょう。

一方、精神的な成長の時期が遅い、いわゆる幼いタイプの子どもは、先に他の子どもが精神的に成長し、成績が上がっていくので、次第に相対的な偏差値が下がることになります。それでも「絶対に成績が上がる」と信じ、努力し続けることで、伸びる時期がやってきた時の、伸び幅は大きくなるわけです。細かく伸びた子どもに追いつく、もしくは追い越すことにもなるはずです。成績的に大逆転現象が起こるからくりはここにあります。

しかし、中学入試は個々の精神的な成長度合いに合わせて受けられるものではありません。小学校6年生の1月、または2月と決まっています。そうなると、なんとかしてその時期までに精神的な成長を促し、伸びるきっかけを作ってあげることが必要になります。

精神的な成長とは頭のなかのタンスを整理すること

では、精神的な成長を促すためにはどうすればよいのかを考えてみましょう。

まず、「精神的に成長した状態」とは、頭のなかに知識を入れるタンスがあり、そのタンスにある引き出しの数が必要な数だけあり、さらに、引き出しの中がきちんと整理されている状態とイメージしてください。精神的な成長をするたびに知識を入れる引き出しの数はどんどん増えるので、成長を繰り返すほど知識が整理されることになります。

頭のなかで知識の整理ができていれば、一度「わかった」と片づけた知識をいつでも引き出しから取りだすことができるので、たとえ初めて目にする問題だったとしても、類似した「わかった」を引き出しからすぐに見つけることができます。その結果、初めて目にする問題も「できた」になりやすいのです。当然のことですが、「わかった」と「できた」の距離が近くなれば、成績は伸びます。これが、精神的な成長が成績の伸びにつながるメカニズムです。

しかし、精神的に成長していない段階では、その時点で学習している内容と比較して、頭のなかにある引き出しが少ないので、せっかく溜めた「わかった」が整理できていません。そのため、「わかった」ことはあるけれど、自分では解けない」ということになってしまいます。そこで必要なことは、「わかったことをできる」ようにしていくことです。頭のなかで整理する訓練を繰り返し続けていくことが、精神的な成長にもつながります。

単元テストを繰り返すことで「わかるからできる」を習得

子どもたちは、精神的な成長度合いに関わらず、教えられたことを理解する力を持っています。つまり、「わかる」ことはできるわけです。

問題は、その「わかった」を頭のなかで整理できるかできないかです。

たとえば、洋服の場合、日常的に着る服はタンスのなかにある見つけやすい場所に片づけるはずです。「わかった」も同じで、何度も出し入れすれば、次第に「わかった」が見つけやすいように整理され、その結果、「できる」との距離が縮まっていきます。その「わかった」の出し入れこそが、早稲田アカデミーが取り入れているYTテストのような週単位の単元テストです。週単位で「わかった」を出し入れすることで、確実に「わかる」から「できる」につなげることができます。

家庭でできる精神的な成長のサポート

精神的な成長が未熟な低学年の段階までは、周りの大人がいろいろと支え、教えるのも必要なことです。しかし、高学年になって「うちの子は幼いから…」というまでも大人がサポートしていたとしたら、子どもたちは精神的に成長できるでしょうか。

子どもというものは、他人からの刺激がなければ精神的に成長することができません。学校とは違った環境、たとえば、塾で同じ目標を持った子どもと一緒に刺激を与えあいながら学ぶ。これも精神的な成長を促すきっかけになります。

そして、何よりも大切なことが、精神的な自立です。実は、幼いタイプの子どもにとって一番の障壁になるものが依存心なのです。依存心があると、日常生活を保護者の方に頼ることはもちろん、勉強面でも「解けない」「難しい」「わからない」と思った瞬間に思考が止まってしまいます。少なくとも高学年になれば、保護者の方から子どもとの距離を空け、依存する気持ちからの脱却をはかることが必要になってきます。このことこそが、子どもの精神的な成長を促し、“停滞期”から脱出させるための一番の秘訣だと考えられます。

塾で学年が上がる2月、実際に学年が変わる4月、そして、誕生日。いろいろな節目ごとに、「あなたは一歩大人に近づいた」と教えてあげてください。そのことを繰り返せば、いつのまにか幼かった子どもも次第に自分の足で将来への道を歩きはじめるはずです。

お便りをお待ちしております
みなさまのお悩みに福田先生が紙面上でお答えします。
下記のアドレスまでお寄せください。
メール：success12@shahyo.com
採用された方には、オリジナル㊙スタンプを差し上げます。